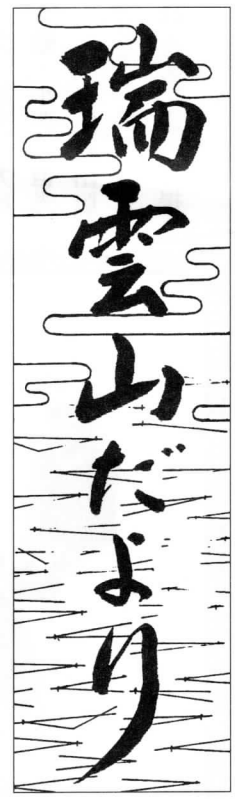



三　松　禅　寺
平成28年1月
第　65　号

檀家の皆様
ご寄稿を
お願いします

# 六和敬

三松寺住職　皆川大真

平成二十八年・丙申・仏紀二五八二年新年おめでとうございます。本年も御道交の程、宜しくお願い申し上げます。

盆と正月は年中行事の中でも、特別な【ハレ】の時です。常識では盆行事が仏教・正月行事は神道。この二つのハレの時に来臨するのは、盆は先祖・死者、正月は歳神・歳徳神と理解しているが、柳田國男の学説によると、盆と正月にやって来るのは等しく先祖であるという。死者の霊魂は子孫の供養を受け時を経て浄化し、やがて先祖霊となってカミの地位へと高まる。五〇回忌を弔い上げとして、死者は一族の集合的先祖に融合し、身近な山に鎮座し「盆と正月」には年神となって子孫の元へ訪れ、さらに農作業の節目に来臨して生活と農耕を見守る田の神・山の神となる。いずれにせよ多くの神々の根っこに先祖が在（おわ）すという。

霊魂を現代風に言い換えて、先祖の人格（人柄・品性）に対し、今生きている私がさまざまなお蔭でいのちを頂いている感謝を捧げて、死者を悼み先祖へと、仏教的に言えば死者を仏の資格（仏弟子）へと追善供養・法事を通じて「死者の人柄を先祖の人格へと敬い更に仏弟子にと」上昇進展する宗教儀礼、葬儀もお別れ会もしない直葬や郵便パックで遺骨を送る時代、心から人情深く大事にしたい。

## 六和敬　ろくわぎょうの教え

俗人なほ家をもち城を守るに同心ならでは終に亡ぶと云へり。況ンヤ出家人は、一師にして水乳の和合わせるがごとし。また六和敬の法あり。各々寮々を構へて身心を隔て、心々に学道の用心する事なかれ。一船に乗ツて海を渡るがごとし。心を同ジクし、威儀を同ジくし、互ヒに非をあげ是をとりて、同ジく学道すべきなり。是レ仏（在）世より行じ来れる儀式なり。

『正法眼蔵随聞記』巻5―9

**訳**　世俗の人も、一国の城を傾けるのは、内部に不信感があるからだ。家で意見の対立があるときは針さえも買えないと、家を持ち、城を守るには皆の心を一つにすることに努めている。ましてや御出家人は一人の師を信じ、水と乳が混じるように六和敬を同行するのです。各々自室に籠って思い思いに勝手な修行をしてはいけない。一つの船に乗って荒海を渡るつもりで、自分の思うようにならない時こそ、お互いに心を合わせ、形や行いを合わせ、互いに至らない点は注意しあい、良い点は認め褒めあって修行すべきです。私たちはともすれば物事の表面の姿かたちに捉われ、好き嫌い・損得の価値観に惑わされます。この智慧の眼を深める集団生活は、個々の才能に関係なくお釈迦様の時代から行ってきた仕方です。

**六和敬**

1、**身和敬**　和気藹々・慈悲包容の態度
2、**口和敬**　愛語・仏法僧を信じ讃え敬う
3、**意和敬**　心を真理の探究に努める
4、**戒和敬**　礼節あるルールで清潔な生活
5、**見和敬**　正しい見解、迷執を離れる
6、**利和敬**　利他の修行・分かち合う

**一つの船（サンガ）**

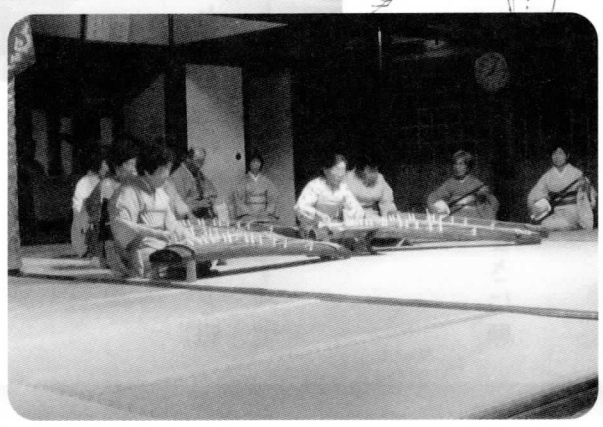
1、**お寺の役割とは**
2、**修行の道場**
3、**信者の教化・仏教発信場所**
4、**礼拝の道場**
5、**葬祭の道場　結婚式～葬式～年回供養**
6、**弟子を育てる家庭道場**
**檀信徒も住職も同じ目的**

【幸福・さとり】に向かって歩む仲間、寺に相集い相励ましあう場がサンガです。お互い気持ちを**晴れ晴れ**となるよう努めましょう。

**善の生き方を貫き**
**信頼と智慧を得る**
**その人生は幸いである**

老いにいたるまで戒を保つのは楽しい。
信じる心が確立するのは楽しい。
あきらかな智慧を得ることは楽しい。
もろもろの悪を行わないことは楽しい。
（法句経333）

秋彼岸
健康めざして



中秋観月会
送月宴

# 「ジャータカのえほん」
## ―おしゃかさまが生まれるまえのおはなし―

おしゃかさまは、シャカ族の王子さまとして、お生まれになるまえに、なんどもなんども、生まれかわって、そのたびにたいへんりっぱな、おこないをされました。

そのけっか、シャカ族の王子さまに、お生まれになったのだといわれています。

では、おしゃかさまは、どんなよいおこないをされたのでしょうか。

「わしのおんがえし②」
文・豊原　大成
絵・小西　恒光
自照社出版
「ジャータカのえほん④」より再掲

### わしのおんがえし②

わしが　みやこを　あらしていることが、王さまの耳に　はいりました。王さまは、「わなをかけろ」とめいれいしました。そのわなに、おやこうこうな　わしが　かかってしまいました。

わしが　王さまのところへ　つれてゆかれたとき、あの　しんせつな　おじさんも　王さまの　ところに　ゆきました。

王さまは　わしに　たずねました、「なぜ、わるいことを　したのか」。

わしは　こたえました。

「わたくしたちの　いのちを　たすけてくれた　ごおんがえしのためです」。

王さまは、また　たずねました。「わしは　目がたいへんよくみえるのに、どうして　わなが　みえなかったのか」。わしは　こたえました。「にんげんでも　むちゅうになっていると、きけんに　きがつかないことが　あるでしょう」。

王さまは、「そのとおりだ」とおもいました。そして、おじさんにたずねました。

「わしたちが　あなたのいえに、しなものを　おとしたのは　ほんとうか？」

おじさんは、こたえました。

「ほんとうです。ちゃんと、べつに、おいてあります。どうか、わしを　ゆるしてやってください」。

王さまは　わしをゆるし、おじさんは　しなものを　ぜんぶ　まちやむらの　人たちに　かえしました。

（J一六四）

## 和文の部

### 七仏通戒の偈

諸の悪しきわざは作すことなく　諸の善きことを奉行し　自らその意を浄めんこそ　これぞみ仏の教なり

### 懺悔の文

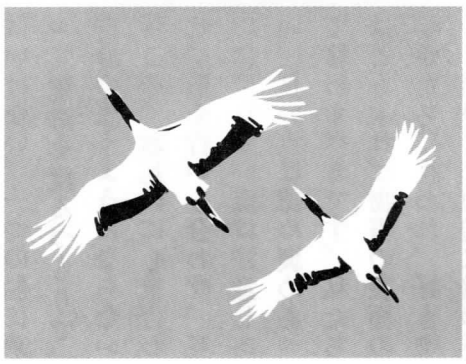
我等さきに造る所の諸の悪しきわざは　みなわれらが避け難き貪りと瞋りと愚さとに由るものなり　われらが身と言葉と意より起る所　すべて我等今悉く懺悔し奉る

### 三帰依文

自ら覚れる者に帰依し奉る　覚れる者は人とし人の尊さなり　まさに願くば人々と共に　悟の道をふみしめて奮い立つ心を起さん

自ら真理の道に帰依し奉る　真理の道は己なきの尊さなり　まさに願くば人々と共に　深く教の蔵に入りて智慧海の如くならん

自ら集いの力に帰依し奉る　集いの力は弥栄の尊さなり　まさに願くば人々と共に　世の人をすべ整えて万障りなきものとならん



## 俳句

秋彼岸三松禅寺大いなる
あをによし大和路映ゆる花野かな
ふるさとは雲州平田萩の宿
女郎花祇尾煌めくや大極殿
はるかなる妻恋ふ越中風の盆

平成二十七年九月吉日

高橋　慈雲